

令和 6 年度『医療分野国際科学技術共同研究開発推進事業
地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）』事後評価結果報告書

研究課題名	アフリカにおけるウイルス性人獣共通感染症の疫学に関する研究
機関名	北海道大学
研究開発代表者名	高田 礼人
採択年度	平成 30 年

- アフリカ諸国の感染症対策は地球規模で取り組むべき課題であるが、現状ではウイルス性人獣共通感染症対策に必要な情報や検査技術が不十分である。本課題は、ザンビア共和国およびコンゴ民主共和国を相手国とし、野生動物、家畜、家禽、節足動物およびヒトの検体を用いて、1) ウイルス性出血熱等のサーベイランス、2) 野生動物、家畜・家禽および節足動物におけるウイルス保有調査、3) ウイルス性出血熱等の診断法の開発と改良を行い、アフリカにおける本分野の研究・教育ネットワークの整備と人材育成を目指した。
- 研究開発代表者は、平成 24 年度から平成 29 年度に本 SATREPS プログラムにおいてザンビアを相手国とした研究課題「アフリカにおけるウイルス性人獣共通感染症の調査研究」を実施し、エボラ出血熱迅速診断キットについて研究開発を行った。本課題は、その成果物であるエボラ出血熱迅速診断キットの開発と改良を通じた社会実装を目標の一つとし、相手国にコンゴ民主共和国を追加して平成 30 年に採択されたものであり、3 つの研究項目についてほぼ全目標を達成した。長期間にわたる共同研究を通じて相手国研究機関・研究者と築いた信頼関係と緊密な連携体制をもとに、感染症を制御する社会的ニーズに合致する成果を創出した。
- 実用化されたエボラ出血熱の迅速診断キットやマールブルグ病の迅速診断キットの開発は、相手国のみならず多くの国々でも当該感染症の対策に大きく寄与する成果である。エボラ出血熱の迅速診断キットが、日本国内で製造販売承認を取得し、コンゴ民主共和国において国内使用許可が得られ社会実装に至った点は高く評価される。
- ウイルス性出血熱等のサーベイランスにおいては、これまでザンビアには存在しないとされていた出血熱ウイルスを発見し、ヒトでの発症例がない疾患についても地域での感染リスクがあることを示した。また、野生動物のウイルス保有のサーベイランスにより、両相手国のウイルスの生態について新たな知見を得た。
- 論文の発表、学会での講演・発表などの活動が適切に行われた。
- 本課題は、その後 JICA の科学技術実装型協力プロジェクトに採択された。相手国で多くの若手研究者が参加し、育成された人材が研究開発を継承することで研究成果の今後の社会実装が期待できる。また、相手国保健省との連携も強化され、北海道大学人獣共通感染症国際共同研究所と相手国研究機関であるザンビア国立公衆衛生研究所やザンビア大学獣医学部との間で学術協定が締結され、持続的な共同研究体制が構築されていることも評価される。
- 今後は相手国において、本研究成果を公衆衛生対策に効果的に組み込む活動の継続、迅速診断キットの国際標準化、さらにはその適切な活用を指導できる現地研究者の育成などが望まれる。